

【原の《技術者一口メモ》〔06〕】

幕末に海を渡った二人の文化人－福沢諭吉と西周－

今回の「原の《技術者一口メモ》〔06〕」は、「幕末に海を渡った二人の文化人」と題して、一人は現在の大分県中津出身の福沢諭吉について、もう一人は現在の山口県津和野町出身の啓蒙思想家・教育者とされる西周(にし あまね)について紹介する。奇しくも両名は幕末に海外に渡り、福沢はアメリカで、西はオランダ留学にて貴重な経験をして明治初期のわが国をリードしたともに優れた教育者と言ってよいであろう。

【Ⅰ】万延元(1860)年の渡米使節団

万延元(1860)年の渡米使節団とは、安政5(1858)年に締結された日米修好通商条約の批准書の交換がワシントンで行うとされたのを受けて、江戸幕府が万延元(1860)年に派遣した77名からなる使節団である。米国海軍のポーハタン号で太平洋を横断して渡米したが、事故などの万が一に備え、正使一行とは別に護衛を名目にオランダに発注新造した咸臨丸を派遣した。

乗組員の多くは軍艦操練所教授の勝海舟はじめとする海軍伝習所(1855～1859)出身者の他、ペリー来航後に幕府の専属通詞となった中浜万次郎や福沢諭吉もいて、艦長は若干30歳、時の軍艦奉行の木村摂津守喜毅であった。



写真-1 福沢諭吉
文化人切手シリーズ

【Ⅱ】福沢諭吉の生い立ち

福沢諭吉は、天保5(1835)年に豊前国中津藩(現在の大分県中津市)の下級武士である父の福澤百助が、大阪の蔵屋敷に赴任中に、兄と3人の姉を持つ末子として生まれる。

天保6(1836)年、父の死去により大坂から帰藩し、中津(現：大分県中津市)で過ごす。

安政元(1854)年に、兄の勧めで19歳で長崎へ遊学して蘭学を学ぶ。(嘉永7年2月)

Ⅱ-1. 福沢諭吉のエピソード① 初めての渡米

「咸臨丸関係者や幕府の役人などに縁のあるわけではない。江戸には蘭学医の総本山の桂川というのがあり、私なども江戸に来れば桂川の家にはたびたび出入りしている。その桂川の家と木村の家とはごく近い親類である。桂川に頼んで、『どうかして木村さんのお供をしてアメリカに行きたいが紹介して下さることは出来ないでしょうか』と懇願して、桂川の手紙を貰って木村の家に行ってその願いを述べた。木村は即刻許可してくれて『よろしい。連れて行ってやろう』ということになった。

考えてみると、その時の世のあり様、人情においては、外国渡航など言えば、日本始まって以来の珍事と言うか、むしろ恐ろしい命がけのことだ。・・・軍艦奉行の家来とという者あまり行く気はないところに、かりそめにも自分から進んでいきたいというのが来たのであるから、実はあっちでも『妙なやつだが、これ幸い』と言うくらいのことであったろうと思う。すぐに許されて私はお供をすることになった。」

「現代語訳 福翁自伝」(斎藤孝翻訳)より

II-1. 福沢諭吉のエピソード② 咸臨丸での太平洋航海記

咸臨丸というのは百馬力の船であるから、航海中始終石炭を焚くということはできない。ただ港を出るときと入るときに焚くだけで、沖に出ればまるで帆船で、その帆船に乗って太平洋を渡るのであるから、それは毎日の暴風で、私は艦長の家来であるから始終艦長の身の回りの用を処理していた。

航海中は毎日の嵐で、始終船中に波を打ち上げる。船体が 37、8 度傾くということは毎度の事であった。45 度傾くと沈むというけれども、幸いに大きな災いもなくただその航海を進んでいく。

37 日要してサンフランシスコに着いた。

航海中、私は身体が丈夫だとみえて怖いと思った

ことは一度もなく、船が沈むということはちっとも思わない。これは私が西洋を信じている気持ちが骨に徹していたものとみえて、ちよつとも怖いと思つたことがない。

「現代語訳 福翁自伝」(斎藤孝翻訳)より



写真-2 咸臨丸(日米修好通商 100 年)
記念切手シリーズ(1960)

【Ⅲ】文久 2 (1862) 年の幕府オランダ留学生

ペリー来航以後、西洋の学術・技術の導入は急務で、幕府は先進国の軍事技術・学問修得のため、文久 2 (1862) 年優秀な幕臣と職人をえりすぐってオランダに派遣した。

乗組員は、軍艦操練所からは榎本武陽他、蕃書調所からは西周と津田真道(まみち)、それに船大工の上田寅吉等の職人である。各人は同地で長期にわたって海軍関連の技術や社会科学、医学等を学び、慶応元 (1865) 年から慶応 4 (1868) 年にかけて順次帰国し、日本の諸科学の基礎を築いた。

【Ⅳ】西周(にしあまね)とは

西周は、オランダで津田真道とともに自然法、国際公法等を学び、西洋哲学、論理学等の導入者として翻訳も多い。

とりわけ西は、「philosophy」の翻訳語として「哲学」なる言葉を創ったほか、「科学」という訳語の考案を始めとして、「芸術」、「技術」、「知識」、「概念」、「心理学」、「帰納」「演繹」などの多くの文化・科学関係の訳語を考案し、「日本近代哲学の祖」と称されている。また、徳川慶喜の側近として、イギリスの議会政治について進講をもした西は、福沢諭吉とならぶ幕末から明治にかけての我が国を代表する知識人の一人である。



写真-3 西 周
文化人切手シリーズ
(1952)

【Ⅴ】西周の生い立ち

西周は、文政 12 (1829) 年に津和野藩の御転医の息子として生まれる。幼名は経太郎と言うが多く幼名があり後に「周助」を長く名乗るが、明治になってからは自ら「周(あまね)」

と称した。

幼少の頃より祖父から四書五経の手ほどきを受け、藩校養老館で大変優秀な成績を修め、20 歳になったときに藩主から儒学を学ぶように命じられる。当時は、子供とりわけ長男は親の身分と仕事を引き継ぐのが一般的で、西家は医者の家系であり長男である周も医者になるつもりでいた。しかし、あまりにも勉学に秀でていたため、周一代に限っては、家業を継がずに儒学者になれとの命（一代還俗）が下ったのである。

その後、本格的に儒学を学び、養老館で教鞭を執るまでになるが、ペリー来航を機に 24 歳で江戸に派遣された後 1856 年に、幕府の洋学研究機関である蕃書取調に助手に迎えられ、その後先に記述したオランダ留学生に選抜されるのである。

【VI】西周の功績

帰国後の西は、翻訳者として多くの業績を残しているが、特筆すべきは哲学をはじめとして多くの学術用語を、漢学の教養を駆使して西洋語の翻訳を進め現代でも通用する語は優に 500 語を超えている。

先に紹介した翻訳語の他に、「主観」「客観」「意識」「理性」「感性」「定義」「論理学」他、我々が日頃使用する語は西の訳語の恩恵を受けているのである。

【VII】福沢諭吉と西周

7-1. 明六社

明六社とは、明治六（1873）年に森有礼（1847～1889 初代文部大臣）の呼びかけで結成された、日本初の近代的啓蒙学術団体であり、西周、加藤弘之、福澤諭吉ら明治初期を代表する知識人たちが結集している。その中で、諭吉はすでに『学問のすゝめ』などで名声を得ていた「民間啓蒙家」「ジャーナリスト的論客」として参加し、政治や社会、教育、文明開化全般について、平易な文体で世論を方向づけるような論説を書き「民指向」を説く。

一方、西周は洋学・哲学・法律・政治学を体系的に導入した「官僚」兼学者であり、「理論家」としての色彩が強い人物といえる。民の福沢諭吉、官の西周と対照的な二人である。

【著者雑感】

現在、私たちが科学論文等を書くときには、「技術」「科学」「理性」「感性」さらに「主観」「客観」等々の西周が創作した用語なくしては、文章作成ができないのが実態である。ちなみに私事の古い話で恐縮だが、50 年前の筆者の修士論文の約 2000 字の所論の中には、科学、科学技術、技術、超科学なる用語を 19 ワード使用していたことを最近になって確認した。西周の創作用語が無ければ筆者の修士論文は執筆できなかったことになる。

また、先の記念切手 3 枚は筆者が小学低学年時に切手収集して入手した思い出深いものである。

2026. 8. 15

特別上級土木技術者

原 稔 明

【参考図書】

1. 現代語訳「福翁自伝」福沢諭吉、斉藤孝 編訳、ちくま新書 912
2. 西周と「哲学」の誕生、石井雅巳、堀之内出版